

今回の130VIEWでは、宮城学院の過去資料でおそらく皆さん一度はご覧になった事のある**“ある写真”**にまつわるエピソードをご紹介します。[宮城学院創立間もない1886年のクリスマス休暇前、当時の学生(41名)が当時の校舎(田辺氏別邸)前で写っている写真]



この写真に写っている**学生の表情**をご覧ください。線で描いたような表情になっているのがお分かりでしょうか？これにはあるエピソードがあります。

宮城学院の公式記録(「天にみ栄え」)の中で、本学院初代校長のE・R・プールボーの姪である、キテー・プールボーがアメリカで着物を作ってもらおうと、ある女性の裁縫師のところを訪れる場面の記述があります(552ページ)その場面で、キテー・プールボーは、部屋に掲げられた1枚の写真を目にします。その写真こそが上記の写真です。宮城学院設立直後、外国伝道局で「宮城学院のために」との思いから、募金活動が行われていたようです。**本活動の中で「募金のお願い」チラシとして使用されていたものがこの写真でした。**

この写真に写っている学生が線で描いたような表情になっている理由、それは「**印刷をし過ぎて顔が分からなくなってしまい、後で手で書き足しながら、印刷を重ねていったものだから**」です。印刷を重ねた理由は募金を広く周知するためです。キテー・プールボーが会った女性の裁縫師がどのように宮城学院に募金をしたかは、「天にみ栄え」の以下記述から知る事ができます。

「この貧しい女裁縫師は彼女自身高い教育を受け得なかったけれどもはるか遠い自分が一度も会った事のない日本のお嬢さんにそれを受けさせたいと喜んで價なくして彼女のわづかの収入から献げておった事を知りました」

※『天にみ栄え』552ページより抜粋

ちなみに、上記エピソードは、本学院創立50周年記念式典(昭和11年11月2日)の際に、当時のクレーテ校長が説教の中でお話されました。「節目の今だからこそ、このような礎の上に宮城学院があることを決して忘れてはならない」クレーテ校長のそんな想いが伝わってきます。**130周年という新たな節目を迎える今だからこそ、宮城学院の礎となり紡いできたこのようなスピリットを知る事は大切かもしれません。**

※上記記事は、宮城学院資料室の監修・ご協力により掲載しております。